

～企業コミュニケーションの価値を多面的に高める「場」～

日本には創業100年を超える企業が3万社以上あり、世界一多い。その歴史を背景に、日本には企業博物館が全国に1000はあるとみられています。創業の精神を伝え社会における企業の役割を明らかにする。取引先の理解を深めるブランディングを実現する。企業の国際化が進む中で社員の帰属意識を高めるインナーブランディングに役立てる。企業博物館は企業コミュニケーションの価値を多面的に高める貴重な「場」となっています。

栗津重光さんは企業博物館を立ち上げ自ら館長を務めました。その後も全国170か所の企業博物館を訪問し、その研究では第一人者です。そんな栗津さんが「企業博物館を観る」をテーマに連載し、その知見を余すところなく伝えます。

筆者(栗津)は1947年生まれ。上智大学卒業後、毎日新聞社に入社。その後、象印マホービン株式会社へ転じ、主に宣伝業務を担当する。2006年に自身で設立を提案した「まほうびん記念館」が08年に開館、初代館長に就任した。館長在任中には京都産業大学で修士号を取得。修士論文は『CC(コーポレート・コミュニケーション)の視点から考察する企業博物館』。退職後は大阪公立大学、大阪樟蔭女子大学にて教鞭をとった。

2023年現在、一般社団法人国際CCO交流研究所理事・主任研究員。所属学会は日本広報学会(2017年から三期6年理事)、日本広告学会、日本展示学会(本年5月理事就任)。

「企業博物館を観る」について

筆者は2006年に企業博物館の業務に携ったのを契機として、退職後も含め、2023年現在までに、全国の企業博物館170か所を訪問している。

本連載では筆者が訪問した企業博物館の特徴、設立の経緯、展示の形態、目指す方向などを描写し、筆者ならではの視点からの観察により得られた知見についてまとめていく。

企業博物館という存在が果たす役割について、そうした施設の開設が始まった1980年代には「宣伝広告目的」とされることがあったが、時代の変遷とともに、その範疇は越えてしまったと言えるだろう。

例えば、ここ数年で特に目立つ傾向としては、企業のアイデンティティを、社員、あるいはグループ社員に徹底するために設立したという理

由が増大している。これは、日本の企業を取り巻く環境の変化に伴ったものだ。

M&Aの台頭や、海外事業活動の急上昇、それに伴う専門人材の登用などで、日本の企業はこれまでと違った問題に直面している。新たに加わった、日本とは異なるルーツを持つ人材に、企業のアイデンティティをどう伝えるのか、浸透させるのか。これは、企業にとっては喫緊の課題である。企業博物館はその解決の一助となることのできる場である。これは、筆者による近年の何件かの企業博物館の観察で明らかになってきた。そうした役割を果たすために新設された企業博物館の中には、一般公開はなされず、社員、グループ社員にのみ来館を許可しているという特殊な施設さえある。言い方を変えれば「企業博物館とインターナル・コミュニケーション」の役割の重要性が高まってきているということでもある。

もちろん、そうした新規の役割にとどまらず、企業博物館には、従来からオウンドメディアとしての機能も依然備わっている。企業博物館を媒介として、あらゆるステークホルダーとのコミュニケーションを図る役割も期待されており、そうした役割についてあらためて考える機会を持つことも、企業博物館という存在を知る上では重要だろう。

近年注目が高まってきた、企業博物館。様々な特徴を持つ施設を本連載で取り上げることで、読者ともその知見を共有できたらと願っている。企業博物館の情報や、ご意見、ご感想等フィードバックをお寄せいただければ幸である。

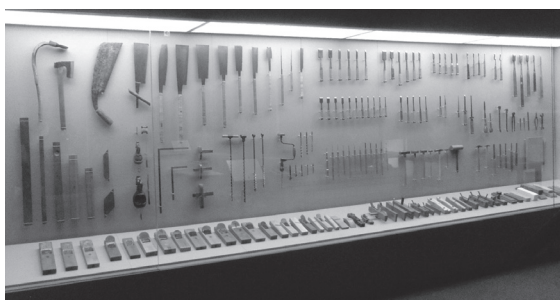
「筆者がこれまでに訪問した企業博物館、史料館、資料館」

月・日 訪問先	月・日 訪問先	月・日 訪問先
06.02.28 グリコピア	10.03.19 帝国データバンク資料館	17.10.12 奈良女子大記念館
06.02.28 江崎記念館	10.03.09 通信博物館	17.10.14 お弁当博物館
06.03.06 印刷博物館	10.05.19 ツムラ漢方記念館	17.11.11 伊勢半本店「紅」ミュージアム
06.03.09 大阪企業家ミュージアム	10.05.19 シャトーカミヤ	17.12.06 放送博物館
06.03.10 サンヨーミュージアム	10.05.20 牛乳博物館	アドミュージアム東京
06.03.10 松下記念館	10.05.20 電力記念館	18.02.17 大東市歴史民俗資料館
06.03.10 松下歴史館	10.07.21 紙の博物館	18.02.28 昭和ミュージアム（昭和丸筒）
06.03.10 松下幸之助記念館	10.09.17 内藤記念くすり博物館	18.03.17 いすゞプラザ
06.03.10 大林記念館	10.09.17 産業技術記念館	18.03.23 島津創業資料館
06.03.14 イトーキ歴史館	10.09.18 トヨタ博物館	18.05.25 田辺三菱史料館
06.03.16 シャープ歴史館	10.10.15 荒川歴史館	18.05.26 適塾
06.03.20 日本ペイント歴史館	11.07.16 日本郵船歴史館	18.06.16 関西大学総合博物館
06.03.29 竹中木工道具館	11.07.16 日本郵船水川丸	18.07.06 松下幸之助歴史館、ものづくり館
06.03.29 神戸らんぶミュージアム	11.07.17 日本新聞博物館	18.07.17 松下資料館
06.03.29 UCC コーヒー博物館	11.07.21 マンガミュージアム	19.03.02 太陽の塔ミュージアム
06.04.18 ミズノスポーツロジギャラリ	11.07.21 京都大学博物館	19.04.09 北里柴三郎記念館
06.05.22 インスタントラーメン発明記念館	11.08.03 セルコン川島織物文化館	19.06.12 ダスキンミュージアム
06.05.22 大阪ガスミュージアム	11.10.15 INAX ライブミュージアム	19.07.01 世界のカバン博物館
06.05.23 日本電産本社	11.11.30 コクヨショールーム（品川）	19.07.17 mandom world
06.05.23 京セラ記念館	12.01.25 東芝科学館（COMIC 会合）	19.09.11 セイコーミュージアム
06.05.25 江戸・東京博物館	12.01.26 昭和ネオン高村看板ミュージアム	ニコンミュージアム
06.05.25 セイコー時の記念館	12.01.26 ソニー歴史資料館	世界のカバン博物館
06.05.25 味の素・食とくらしの小さな博物館	12.01.18 甲南女子大資料館	19.10.07 トヨタ博物館
06.05.25 恵比寿麦酒記念館	12.05.24 明治村	ブラザーミュージアム
06.06.26 日本電気硝子	12.07.19 織物文化館	20.01.27 紅ミュージアム
06.06.28 近鉄資料館	12.10.14 田辺聖子記念館	20.01.28 オリンパスミュージアム
06.09.27 日立歴史館	13.06.21 オムロン啓真館	21.04.02 キューピーマヨテラス
06.10.12 世界の貯金箱博物館	13.09.12 カワサキワールド	21.08.11 東リインテリア歴史館
07.02.20 ハウス・オブ・シセイドウ	14.06.22 miemu	21.12.07 ムラタインノベーションミュージアム
07.02.20 バイロット記念館	14.05.25 荒川歴史館	22.04.13 物流博物館
07.02.20 アドミュージアム東京	15.11.27 田辺三菱史料館	22.04.14 セイコーミュージアム銀座
07.02.21 がす資料館	16.06.20 司馬遼太郎記念館	22.04.26 クロネコヤマトミュージアム
07.03.07 日本航空広報部アーカイブズセンター	16.03.17 パナソニック歴史未来館	22.04.27 東芝未来科学館
07.04.26 花王ミュージアム	16.07.24 漢字ミュージアム	22.06.20 ニッスイパイオニア館
07.04.27 たばこと塩の博物館	16.11.24 ソニーショールーム	22.06.21 TOTO ミュージアム
07.08.10 造幣博物館	16.12.09 LIXIL 資料館	ゼンリン地図の資料室
07.10.16 神戸華僑歴史博物館	17.02.11 ミツカンミュージアム	安川電機未来館・歴史館
08.02.19 イトーキ歴史館	ブラザーコミュニケーションスペース	22.07.02 竹中木工道具館
08.08.09 青葉城資料館（仙台）	カゴメ記念館	22.07.04 立石一真記念館
08.09.11 消防記念館（東京・四谷）	17.02.12 鞍ヶ池記念館	22.07.05 S パーク
08.09.11 カメラ博物館（東京・半蔵門）	豊田佐吉記念館	22.09.16 グンゼ博物館
08.12.03 ユニチカ記念館	スズキ歴史館	22.09.29 YKK センターパーク
09.02.11 渋沢資料館	ヤマハコミュニケーションスペース	22.10.04 郵政博物館
09.02.13 東芝科学館	17.03.14 京都鉄道博物館	22.10.05 地下鉄博物館
09.03.05 印刷博物館	京セラミュージアム	22.12.06 梶尾俊雄発明記念館
09.03.06 オカムラ椅子の博物館	稲盛記念館	22.12.07 Daiichi-Sankyo くすりミュージアム
09.06.11 鳴津歴史館・京都	17.07.20 宝ホールディングス歴史資料館	22.12.10 スペース Labo
09.06.30 あずきミュージアム・姫路	17.08.03 TOTO ミュージアム	22.12.11 わかちく史料館
09.08.06 大和ミュージアム・呉	ゼンリン地図の資料室	22.12.12 立花家資料館
09.08.06 マツダミュージアム・広島	安川電機未来館・歴史館	23.01.11 五十嵐健治洗濯資料館
09.08.06 おたふくソース記念館・広島	17.08.22 ヤンマーミュージアム	23.03.14 東武博物館
09.09.10 牛乳博物館・栃木・佐野	17.09.11 容器文化ミュージアム	伊藤研修センター
09.11.20 資生堂企業資料館・掛川	ニコンミュージアム	23.04.11 金融博物館（独・フランクフルト）
09.11.21 ミツカン酢の里	17.09.28 セイコーエプソンものづくり館	23.04.15 チョコレート博物館（独・ケルン）
09.12.29 富山・ますのすしミュージアム	諏訪湖時の科学館儀象堂	23.05.25 プリジストンイノベーションギャラリー
10.02.11 仁丹歴博	17.09.29 岡谷蚕糸博物館	23.06.13 JAL スカイミュージアム
10.02.19 なにわの今昔館	プリンス & スカイラインミュージアム	

竹中大工道具館 (登録博物館)

神戸市中央区熊内町7丁目5番1号

<https://www.dougukan.jp/>



「大工道具の標準構成・第一形式」

【概要・設立の経緯】

竹中鍊一は、憂いていた、嘆いていた。「このままでは、日本から大工道具が消え去ってしまう」。鍊一は、創業以来160年の歴史を誇る竹中工務店の経営者であった。竹中工務店は、江戸時代前期の1610年（慶長15年）に織田信長の元家臣であった初代竹中藤兵衛正高が尾張国名古屋にて創業、神社仏閣の造営に携わり、現在ではあらゆる建築物を手掛ける日本を代表する老舗企業である。昭和後期、日本古来の大工道具が建築のオートメーション化の進展によってすたれていく。何らかの形でこれらを残しておけないかと鍊一は考え、大工道具を展示する博物館の設立を構想した。

しかし、当時は会社の業績が不振だったこともあり、言い出すことができなかった。鍊一は会長職に退いた後に道具館建設を提案し、1984年、神戸市中山手に館が設立された。その後、大幅な展示のリニューアルや、移転を経て、JR新神戸駅付近の場所に建設されたのが現在の「竹中大工道具館」である。リニューアルや移転の度に展示内容は充実されていき、現在は35,000点の収蔵品を誇る施設となった。当初

は企業博物館として開館した後1989年に財団法人の設立が認可され1992年には博物館法に基づく歴史博物館として登録された。

日本の建築は、明治初期まで木造建築一筋の歴史を歩み、木造建築の様式の多様化、造形美、それを具現化した高度な技術と優れた職人の技能は他の国に例がない。独特の進歩発展を遂げてきた建築だと言える。それを支えてきたのが、道具の王者といわれる「大工道具」。そうした大工道具も、品質が良いものほど磨滅するまで使われるという厳しい宿命を負っており、後世まで残ることが難しい。さらには産業技術における機械化、電動化の進展により、手仕事のツールである大工道具そのものが次第に姿を消していつている。

月尾嘉男は道具館が出版した『30年の歩み』の巻頭で次のように語っている。「神社建築の遷宮を頂点として、新造や修繕により木造で空間を構築する技術を後世に伝達するだけではなく、その空間に内包される文化を代々継承していくことが大工という職能の本質である」。

建築の生産方式のシステム化が進み、工場生産と省力化による効率化が優先され、電動工具が普及した現代にあって、次第に消えていく古い時代の道具や優れた道具を、民族遺産として収集、保存し、これらの研究、展示を通して工匠の精神や道具鍛冶の心を後世に伝えていく。これを目的として、「竹中大工道具館」が設立された。

【展示内容】

特に鋸（のこぎり）、鉋（かんな）、斧など、大工道具がどのように変化を重ねて、進化を続

けたのかという事が、展示を通して理解できる。レブリカだが実物そっくりの展示物を見ることによって、それぞれの道具が、どう変わってきたのか、道具たちの発展の歴史や、人間の工夫の素晴らしさを感じることができる。

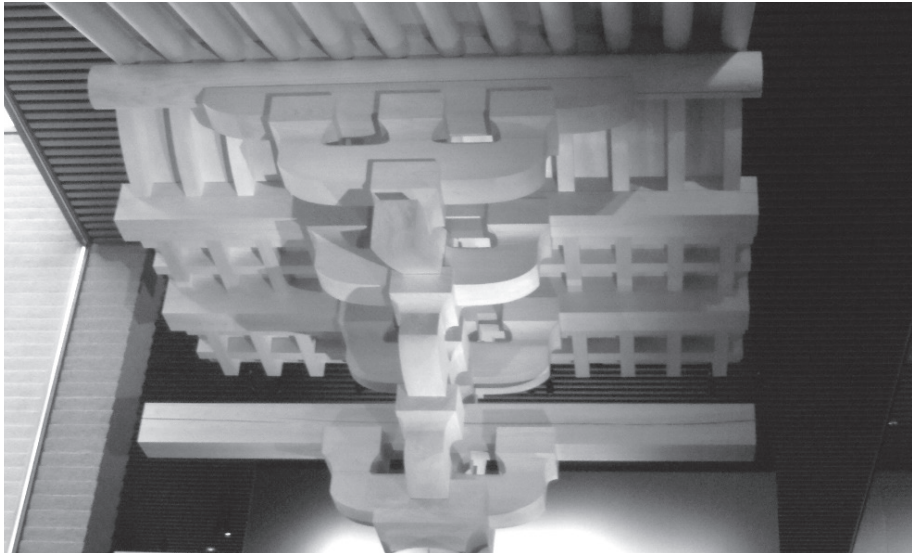
常設展は「歴史の旅へ」「棟梁に学ぶ」「道具と手

仕事」「世界を巡る」「和の伝統美」「名工の輝き」「木を生かす」の7つのコーナーに分かれる。各コーナーでは「五感に響く展示」を心掛けることで、来館者に大工道具を巡る世界の広がりや豊かさを伝えている。

また「大工道具の標準構成」のコーナーでは179点の大工道具が一堂に展開されている。電動の工具が一般的ではなかった頃に、「第一形式」と呼ばれるスタイルで、家一軒建てる際に必要な数だという。安普請の「第二形式」用であっても72点が整えられていた。第一形式では錐（きり）だけでも26種類。鉋（かんな）も40種類、鑿（のみ）に至っては49種類が必要であったという事実には息を飲まされる、圧巻の展示である。

【企画展・イベント・出張展示】

古い時代の優れた道具を保存することをはじめとして、「道具」を使いこなす「人」の技と知恵や心、そこから生まれる「建築」とそれを取り巻く木の文化について、様々な企画展や講演会、セミナー、出張授業、体験教室などのイベ



館内には奈良・唐招提寺金堂の組物模型（原寸）がみごとに再現され、シンボルゾーンに展示されている。その組み立ての様子はCGで再現される。

ントを定期的で開催している。

また、所蔵する豊富な大工道具や関連資料、映像などを可能な範囲で活用しながら、より質の高い学びになるように、学校や地域の教育活動の支援を行っている。日本の企業博物館のなかで出張展示のもっとも多い施設ではないかと考えている。国内ばかりではなく、海外への展開例も数多くある。

【栗津の視点＝見どころ】

館内の展示や、壁、階段、扉、天井などの施工は現在考えられ得る最高の職人がかかわっている。そのため、スタッフに言わせると、建築学科の大学院生であっても施工の全貌を把握するのは困難とのこと。粋を集めた展示物と内装で仕上がっている館である。来館される場合はぜひ、音声ガイドの利用やボランティアがかかわっている解説案内を聴く手筈を整えていただく事をお勧めする。

入館料 一般 700 円。シニア・大学生・高校生 500 円。中学生以下は無料。